A. Janku, G. J. Schenk, and F. Mauelshagen (eds.), *Historical Disasters in Context: Science, Religion, and Politics*

大窪一也　住友一木
福元健之　増永理考

地震、津波、そして原発事故。複合的な災害となった三・一一は甚大な人的・物的損失をもたらし、交通網や生活物資の流通を混乱に陥れた。福島第一原子力発電所の状況からは、災害の影響が今後もきわめて長期にわたって続くであろうと予測される。一連の出来事を通じて災害に対する文明の脆弱さが自覚され、その関係があらためて問われている。学問の世界もまた、この現実と無関係ではあり得ず、三・一一以後の歴史学が模索されている。このような現状にあって、国際ワークショップ「文化-比較のパースペクティブから見た歴史的災害」（二〇〇五～二〇〇九年）の最終的な成果としてまとめられた本論集は、格好の思索と比較の素材を提供している。

編者A・ヤンク、G・J・シェンク、そしてF・マオエルスハーゲンらによる第一章「序論」では、本論集の基本的な立場について述べられている。二〇一一年最初の三カ月の時点で、『ガーディアン』紙は日本、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、スリランカ、ビルマや南アフリカなど、世界各地における災害を報道していた。このように目の前で起きている事態によって、災害研究への関心が国際的にも高揚していると編者たちは説明する。しかし、彼らによれば、社会科学者らによる研究は政策作成にとっては確かに重要であるものの、個人や集団がどのように災害を経験したのかという文脈からそれを切り離すところに問題があった。また歴史学においても、環境史と人類の歴史とのタイムスケールの差異が過度に強調されることによって、双方の関係はこれまで十分に問われてこなかったのである。編者らを中心とした上述のワークショップはこのような研究状況への反省を出発点としていたのであり、それゆえに本論集では、特定の歴史的な文脈のなかに位置づけられた災害の社会的な所産について考察されることとなった。その際、中心的な役割を果たしているのは「科学」、「宗教」、そして「政治」という観点である。つまり、第二章からは、災害の解釈や事後における秩序の再建をめぐって展開される政治、そこに緊張関係をもって立ち現れる科学や宗教の言説などに焦点を当てつつ、例えば、災害に対する社会的な対策、それによる社会の変容やその過程における災害の経験のあり方といった問題が扱われているのである。

以下、各章の内容を具体的に検討していくが、あらかじめ執筆の分担について記しておく。第二～四章を増永理考（専門は古代ローマ史。以下同様）、第五～七章を住友一木（ドイツ啓蒙主義研究）、第八・九・一三章を大窪一也（近代イギリス領インド史）、そして序論、および第一〇～一二章を福元健之（近代ポーランド史）が担当した。そして、それらの内容を踏まえ、住友と福元が総括的コメントを執筆した。

ローマ帝国下において自然災害が発生した際、帝国のパトロネジ関係の頂点に立つ皇帝の責務の一つである災害援助は、いかなるものであったのか。第二章「紀元一世紀のローマ皇帝と『自然災害』」でM・マイアーはこの点を論じる。災害処理の際、アウグストゥス帝やティベリウス帝は、財政援助や免税などを行い、模範的な支配者像を提示した。しかし他方、ネロ帝は復興支援の面で模範的とは言えず、人々の期待を裏切った。帝国という新秩序の開始にあたって、被災地への継続的な支援は、帝国統治の安定化や皇帝の地位の正当化とも、深く関係していたのである。皇帝自身の意図については慎重になる必要があるが、ローマ帝国における皇帝の位置づけや安全保障といった帝国的理念を考える上で、災害に対する反応は示唆的である。ただし、神と人間の関係に起因するとされた災害への宗教的反応については、別途検討の必要があると評者は考える。

時代は下って、第三章「自然災害への対処――ルネサンス期のトスカナと上ライン渓谷における環境、社会、そして政治（一二七〇～一五七〇年）」においてシェンクは、社会はどの程度、自然環境によって形成されるかを、フィレンツェとストラスブールの二都市を例に分析している。両都市では、頻発する洪水に対して、当初はその場しのぎの対策が取られたが、後に専門機関が発足し、費用便益、公共善などが考慮され、対策はより組織化していった。長期的に見て、災害の予測とそれへの対策は共同体の政治的・社会的構造を形成するのに効果的であったことが示されている。こうした事例が時代状況に関わらず一般的であったかは明らかにされていないが、災害によって新しい秩序や共同体が形成されていく過程を明確に見てとれる。詳細な検討はないものの、とくに宗教的要素を含む公共善という考えは、災害と社会の媒介として機能し、社会発展の大きな要因となっていたと考えられる。

具体的な災害対策だけが人々と災害の接点であろうか。E・フルトンは第四章「神の御業――宗教改革期ヨーロッパにおける災害の宗派化」で、宗派によって異なる災害解釈が人々の結束・分断を促進していたことを、ネーデルラント、イングランド、スイスのルツェルンという三つの事例に基づいて検討している。各事例から、諸宗派が災害を都合よく解釈し、自らのアイデンティティの強化に役立てていることが分かる。祈りの実践などは、宗教的結束を強める一方で、各宗派の地位向上という政治的機能も果たしていた。解釈する主体性の問題はここでは扱われてはいないが、前二章のような具体的対策の実践とは異なり、宗派による災害解釈は、言説という点で社会と自然が接触する一つの方法であり、新たな共同体を形成することに正当性を付与するものであった。

次に啓蒙期へと時代は移り、第五章「海との闘い――自然を管理しようとする形而上と形而下での試み、そのはざまで揺れる近世沿岸社会」で、M・L・アレマイヤーは、一八世紀ヨーロッパの堤防建設をめぐってなされた災害解釈を問題にする。人間が自然を管理することは神意に逆らう罪とみなす牧師の宗教的見地と、啓蒙思想に感化されて自然の管理を標榜する歴史家と官吏の科学的見地との相克、そして科学の優位が対比的に描写される。後半部分では、堤防建設技師達がキリスト教的世界観を断ち切れないまま、自身の職業を正当化するために科学を是認していく葛藤に

迫る。本章は、堤防建設技師達が抱く啓蒙期特有の宗教と科学の葛藤にその醍醐味があるだろう。このことから、ここでは言及されなかったものの、自身の見解を固く譲らない牧師や官吏にも、宗教と科学の葛藤が存在すると考えられる。彼らもまた、自身の職業を正当化するためにその葛藤を表面に出さなかったと、本章から推し量ることができるだろう。

続く第六章でも、宗教と科学の緊張が問題となる。「近世フランスの地震――旧秩序から新たな危機の誕生まで」において、G・クネは地震を社会的に構築された出来事として捉え、近世フランスにおける地震解釈、そしてその社会的影響を考察する。一六・一七世紀フランスでは、地震は神の御業であるという解釈が君主によって示されることで、人々の不安は抑えられ、災害管理はローカルなレベルで行われていた。しかし、一七四〇年代を転換期として宗教的解釈は後退し、地震は啓蒙思想の影響を受けた自然科学の範疇で議論されるようになる。そして、一七五五年のリスボン大地震を機に地震解釈の世俗化が進行し、危機の予測が一義的に目指される社会へと変容を遂げる。本章は宗教と科学のせめぎ合いの結果がどのように社会へ反映されるか、という局面を扱っている。しかし、宗教に基づく災害解釈から科学に基づくそれへと移行する過程が滑らかでないことは、前章からも明らかである。論者は社会的影響に重心を置くあまり、この点を看過しているのではなかろうか。

N・A・ルプケによる第七章「地球惑星科学における終末言説――一七〇〇年から現在まで」では、「終末」に関する地質学及び惑星科学の言説が、どのように現在まで残存してきたのかに注目する。地質学において、洪水地質学は疑似科学的な聖書中心の世界認識をかろうじて保持し続ける。しかし、ノアの洪水を中心に世界を説明する洪水論、地層研究と聖書の記述との一致を求める天変地異説は、一八三〇年代に科学の前に屈する。他方で、世界終焉の科学的可能性を常に内包した形で、惑星科学は現在に至るまで発展し続ける。実在しない災害の言説レベルでの共有に着目した本章は、論集のなかでも異色の論稿である。ただし、本論集の目的と照らし合わせるならば、終末認識と社会との関係が見えてこない点について指摘せねばならない。既存の秩序が崩壊することに対する恐れと期待を含む終末認識は、社会的な運動と少なからず接点をもつはずであり、終末認識によって生じる災害解釈の変化や社会変革にも関心を払うべきだろう。

人類が災害に対峙するとき、歴史学者には何ができるのだろうか。そのような問いに対して、A・ディクスは第八章「忘れられたリスク――山地の地すべり」でひとつの答えを提示する。著者はシュヴァーベン地方と南チロル地方の現地人の間で共有されていた山間地の地すべりに関する知識が、近代化された公的機関の地域情報に回収されるなかで、いかに変容し失われたかを示す。中央集権的な公的機関による地域調査は、地方の災害に関しては被害の大きい事例にしか注意を払ってこなかった。それゆえに、そのような調査の成果としてまとめられた公的資料からは、地域共同体のなかで継承されてきた、災害対策に有益な多くのローカル・ナレッジが漏れ落ちてしまったのである。問題は、地域のリスク評価の多くがそのような資料にしか依拠せず、結果的に一面的な評価になってしまうということである。こうした問題に対し

て、忘却されたローカル・ナレッジを地方の文書館に眠る史資料から再構成することが有効であるが、ここにおいて、著者は、歴史学者が人類社会に対して貢献できる余地があると主張するのである。

第九章、S・クノストの「都市の形成――アレッポの外国人コミュニティと一八二二年の地震」では、アレッポのワクフ（イスラム世界における寄進財）に設置されたフランス領事館の被災と移転、復興を例にしながら、地震によって生じたワクフや都市構造の変容が検討されている。その変容として、ワクフの建築物修復の過程で西洋建築様式が広まったこと、ワクフの賃貸契約を中心としたイスラム法を駆使して都市の復興に関与した外国人商人が、新たな地主層として台頭してきたことが挙げられる。つまり都市の発展は政治・経済・社会的要素だけでなく、災害によっても加速するのである。そこからは破壊と喪失だけではない災害と社会の複雑な関係の一端が見て取れよう。課題としては、考察対象となった領事館の変遷と都市全体の発展との因果関係が見えにくいことが指摘できる。

第一〇章、E・ローランド「震災-対-火災――一九〇六年サンフランシスコ災害直後における保険金をめぐる闘争」は、災害と「リスク」の問題を「管理」と「忘却」という二本の軸から論じる。地震後に起きた火災によって街の全人口の半数にあたる二〇万人が住宅を失うなか、未曾有の負担を迫られた再保険会社は、各保険会社に一致した行動を取らせることで負担を軽減しようと交渉を開始した。その過程では、地震に併発した火災に対する保険業者の対応を調査する委員会が組織されたのであるが、それにしても、地震が頻発し、しかも乾燥した気候のために火災も多いこの地域で、このような対応が後手に回ったのはなぜだったのだろうか。著者によれば、都市経済に及ぼす悪影響を恐れた地元の商業階層が、メディアの操作などを通じて、都市のイメージから災害のリスクを切り離したところに大きな要因があった。このように私的利益の見地からリスクの忘却を図ることは、アメリカの「災害の文化」に広く共通していた可能性も示唆される。

続いて、G・M・ヴィンダーによる第一一章「異国の災害を伝える――『ロサンゼルス・タイムス』と国際救援、一八九一～一九一四年」でも、アメリカの「災害の文化」が考察される。『ロサンゼルス・タイムス』紙にとって、前章で見た地震は自発的な救援寄付を紙面上で積極的に呼び掛けるきっかけとなっていた。その後、チリやイタリアなどで起きた震災を報じるなかで、そのような姿勢が定着していったとされる。本章では、報道記事は読者が遠方の災害に主観的に参加する「儀礼」であり、そこで彼らは「良きサマリア人」として、「最も富裕なアメリカ人」に相応しい価値観を身につけるよう語りかけられていたとされる。行論は公共性やナショナリズムの理論に沿って展開されており、非常に明快である。しかし、その裏では、救援寄付金の増額とナショナル・アイデンティティの普及とが比例の関係で論じられるなど、過度に単純化された解釈もみられた。

ヤンク「自然災害から国民的災害へ――一九二八～一九三〇年の中華民国における飢饉」（第一二章）もまた、テーマは災害とナショナリズムである。本章では、中国西北部を中心に一〇〇〇万人もの犠牲者を出した飢饉の解釈をめぐって、「国民」という

表象が様々な立場から戦略的に使用されたことが明らかにされる。発足間もない政府は、中国の政治的指導者として国際社会に自らを宣伝しつつ、地域的な「自然災害」への国際支援を期待していた。それに対して、当該災害の只中で『大公報』紙（天津で発行）は、軍事を優先する蔣介石政府の失策による「人災」との認識を示し、「国民的災害」に対する国内での連帯を主張した。その言説は反響を呼び、飢饉を「人災」、つまり中国の政治的な問題であって、支援に値しないと多くの国際支援団体は判断した。その結果、中国国内の基金が国際的なそれを大きく上回ることとなったのである。もちろん、ここで統一的な国民形成が達成されたのではないことは著者も指摘するところであり、その後の日本帝国による侵略によって、事態はさらに複雑化したと考えられる。

日常生活と密接に関わるがゆえに、「科学的」な気候変動予測に対する社会的な関心は高い。しかし、第一三章「気候変動――気候変動予測の歴史」でマオエルスハーゲンは、気候変動の「予測」は純科学的なものにはなり得なかったと主張する。なぜならば「予測」をめぐる言説には科学者以外に、政府や経済界、環境団体からSF作家まで幅広い層が関与してきたため、「予測」がそれぞれの利害や時代状況に影響されやすかったからである。第八・一〇章とも関係するが、本章からは社会変容自体が「災害」の認識を変化させてしまう様相が見て取れる。その際、重要なキーワードとなるのが「リスク」と「対応」である。単なる自然現象が「災害」となるのは、それが社会の「リスク」と捉えられるからである。そしてそこに災害に「対応」する必要も生まれてくる。評者には、これら三つの章では、「リスク」や「対応」の捉え方が社会状況によっていかに変容したかは示されていても、その原因については十分に考察されていないと思われた。これは現在の災害認識にもつながる点ではなかろうか。

冒頭でも言及したように、本論集は数年越しの国際的な共同研究の成果としてまとめられたものであり、これに先立っていくつかの論稿が発表されているが①、それらにみられる方向性は本論集において一層の発展をみせている。その意味でも本論集は、暫定的ではあれ、一つの到達点を示したと言えよう。これを受けて、われわれはその射程をどう広げられるだろうか。以下でそれを論じることで本書全体への評言に代えたい。

あらためて各章を通観したとき、本論集からは、災害と社会との関係を論じるための三つの論点を読み取ることができると評者は考える。その一つは、「共同体」である。ローマ帝国や都市の統治を事例とした章では、災害は単なる共同体衰亡の危機なのではなく、ときとして諸制度の再編や内的結束を促す機能を果たしていたことが示されていた。もちろん、宗派やナショナリズムといった要素が加わることで、災害に遭遇した諸集団間の対立が熱を帯びるという事態が発生することも既述のとおりである。そして、こうしたことから、「言説」という二つ目の論点を導き出すことは容易であるように思われる。とりわけ、災害の解釈をめぐる科学と宗教の緊張関係にいくつかの章が充てられている点は、本論集の射程を考えるにあたって無視できないものとなっている。ただし、近世における科学と宗教との対立を、前者が勝利するという目的論的な図式で描いてしまうことは、今後、克服されなくてはならない。しかしまた他方で、科学的な知が、実際のところ、

様々な異質な観念や利害関係から構成されているということも、第七・一三章の著者たちが明らかにしているところでもある。いずれにせよ、現代の歴史学全体において、宗派化への関心の高まりが見られる状況や、必ずしも「右肩上がり」ではない科学史を模索しているといった状況にあって、本論集は災害という切り口の有効性を雄弁に示している。

そして、三つ目の論点は、「リスクとそれへの対応」である。ある自然現象が「災害」と認識されるのは、そこにリスクが見出されたときであり、そこから減災、あるいは災害自体を未然に防ぐための対策がなされる。「対応」のひとつに「忘却」も含まれることは、第一〇章の事例にみられるが、非常に興味深い。これらのことは近代に限られたことではなく、それぞれの時代や地域において、どのような論理で災害認識がなされたのかということは、第八章で言及された歴史家による社会的な貢献とも関わってくるが、追求される意義の大きいテーマではなかろうか。以上で見てきた「共同体」、「言説」、そして「リスクとそれへの対応」といった論点は相互に重なっており、多様なアプローチに開かれている。

近年の災害史研究では、災害を通じて立ち現れる文化や共同体の変容に主軸を置く考察が主流なようである。わが国でも、日本史学や考古学の分野において、地震、津波や噴火に関する研究の発展がみられている。例えば、鯰絵などの諷刺画から震災と日本文化の関係を探る研究や、寒川旭氏による「地震考古学」の提唱など独自の蓄積が挙げられるが、とりわけ、北原糸子氏編の『日本災害史』（吉川弘文館、二〇〇六年）は、災害後の社会で見られた対応や災害をめぐる言説分析に関する研究の成果を学際的に取り入れた災害史の試みとして特筆に値する。他方で、西洋史学の分野では、『災害ユートピア』（R・ソルニット著、高月園子訳、亜紀書房、二〇一〇年）が翻訳されるなどに限られており、日本史学や考古学でみられるような成果は、西洋史学においては未だ現れていない。ここにおいて、本論集が日本の西洋史学に対して持つ意義が、とりわけ大きく映りはしないだろうか。上述の三つの論点に加えて、本論集には、地理学や自然科学などの隣接諸科学の成果を援用している点や、時に地域の記憶の中からあらわれ、時に国際的な現象としてあらわれる災害を一次史料に立脚しつつ考究する点など、参考とすべきことが多く含まれているのである。

三・一一以後の歴史学はどのような形をとるのだろうか。本書評がその模索のためのひとつの材料となれば幸いである。

① *Historical Disaster Research: Concepts, Methods and Case Studies*, ed. G. J. Schenk and J. I. Engels (*Historical Social Research*, Special Issue, No.121 = Vol.32.3, 2007); *Coping with Natural Disasters in Pre-industrial Societies*, ed. M. Juneja and F. Mauelshagen (*The Medieval History Journal*, Special Issue, 10, 1+2, 2007); *Katastrophen: Vom Untergang Pompejis bis zum Klimawandel*, ed. G. J. Schenk (Thorbecke: Ostfildern, 2009).

(296pp, 2012, Routledge: New York & London, £80.00)

（大窪一也　京都大学大学院文学研究科修士課程）
（住友一木　京都大学大学院文学研究科修士課程）
（福元健之　京都大学大学院文学研究科修士課程）
（増永理考　京都大学大学院文学研究科修士課程）